

平安京右京二条二坊のまじない遺構

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

調査のようす 1995年、中京区西ノ京にある京都市立朱雀第四小学校の東南隅で、平安時代のまじない跡がたくさん見つかりました。ここは平安京右京二条二坊五町、すなわち二条大路と西鞍負小路の交差する西北部にあたります。

発掘調査では二条大路と北側溝である溝1が検出され、その北側には9世紀の建物2と10世紀の建物5～7・井戸・塀などがありました。この10世紀の建物と建物の間をぬって幅2～5mの溝3が二条大路に向かって流れ、東からの溝4と合流していました。

9世紀の段階では、溝3や溝4は形成されておらず、西北部の建物2とその雨落溝、二条大路、溝1がありました。四行八門制に照らしあわせると、建物2は東一行と東二行、および北七門と北八門

にわたって建てられていた大型建物とわかります。つまり、この宅地は、調査地の北方と西方にさらに広がる範囲を占めており、平安宮に近いことから、位の高い人の所有地だったと思われます。

10世紀になると土地の所有者が複数になり、敷地も細分化されていったようです。その境界が溝3と溝4、塀なのです。溝3は東一行と東二行の境を流れて土地を東西に分け、溝4と共に宅地を区切っていました。今回これらの建物付近と、家々の境界の溝から多くのまじない跡が発見されました。

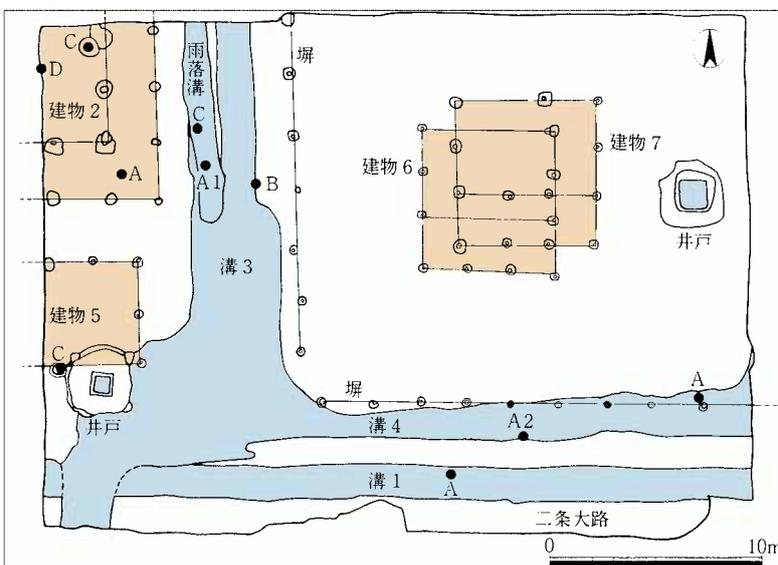
まじない遺構 見つかったまじない跡は写真のA～Dの4タイプに分けることができます。

分布のようすをみると、AとBは溝の中やその近くで、CとDは建物近くからの検出です。このよ

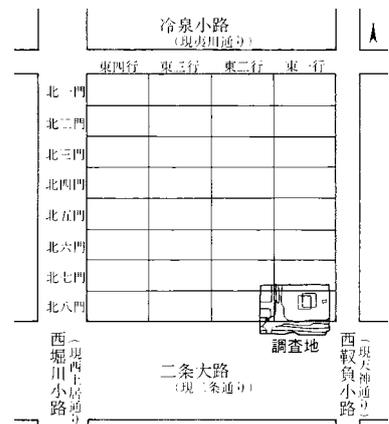
うな状況から、AとBは水や境界に関連したもので、CとDは土地や建物に関したものだと考えられます。さらにAについては、これまでに小瓶子だけのものが平安京内から多く見つかっており、Bと同様のものは平安宮の豊楽院からも見つかっています。CとDは平城京でたびたび出土する須恵器の容器に近いものです。

特にA1では小瓶子の中に白い小石が、A2の小瓶子には赤い小石が入っていました。白と赤はそれぞれ西と南を表す色です。北と東では見つかりませんでした。方向を示す色の小石を四方にそれぞれ配置することは宅地の結界を定め、さらにその範囲の守護を目的とするものです。従ってA1・A2の小瓶子は建物6・7を作る際に埋められたと考えられます。

文献にみるまじない 昔の史料や物語に、当地で検出したまじない遺構によく似た例があります。



調査地の略図 (1 : 350)



五町の中のような



A：須恵器の小瓶子を埋納、5カ所。その内A1・A2には色石が入っていた。



B：土師器皿2枚を口縁部同士合わせたドラ焼き状のもの、1カ所。



C：多数の拳大の石の上に、土師器の壺と皿を置いたもの、3カ所。



D：土師器の甕に銭貨3枚を入れたもの、1カ所。

4つのタイプのまじない遺構

平安時代末期の『兵範記』には高倉殿に鎮祭の時、陰陽師が四方と中央に穴を掘り、それぞれ五色玉を入れた瓶を埋める記事があり、これはA1・A2と同類です。

さらに鎌倉時代の説話集『宇治拾遺物語』には、御堂関白藤原道長のこんな話があります。

道長が法成寺を建立している時、かわいがっている白い犬をつれて毎日見にいっていた。ある日、寺の門前に来るとその犬が道長の前をふさぐように走り回って吠え、中に入れないようにした。道長は何かわけがあるのだろうと思い、陰陽師の安倍晴明を呼び占わせると、道の中に道長を呪うものが埋められているという。掘ってみると、はたして土器を二つうち合わせたものがでてきた。これはBのまじない皿と同じタイプです。

このような例から推察すると、見つかったまじない跡は何ものかを鎮める、封じ込め撃退するといった意味をもつものと思われます。

現在でも家を建てる時、工事を始める前に神主を呼び、祝詞と「おはらい」の儀式があります。なるべくその土地の神様が怒らないように供物を捧げて許しを請い、工事の安全を祈るのです。

奈良時代から子供の健康と出世を願って埋納されていた胎衣壺(後産や銭・文具類をいれた)は、やがて埋納する土地の神に対して、安全を祈るまじないへと意識変化していきました。同様に内容物も簡素化していきます。これが今回見つかったCやDのまじない跡なのです。ではそのような「おはらい」を直接行なったのはどのような人たちだったのでしょうか。



『不動利益縁起』にみる陰陽師

東京国立博物館蔵 『新修日本絵巻物全集 30』
角川書店よりトレース

当時の社会 平安時代も中期になると、国家的行事として執り行なわれていた「おはらい」などのまつりが、貴族や民衆など一般の人々の間にも流行するようになりました。というのも、このころ全ての天災や疫病や社会不安は非業の死をとげた人のたたりのせいだと信じられていたからです。

たとえば菅原道真に対し、死後90年目にして太政大臣が追贈されているのは当時いかに怨霊を恐れていたかを物語るものです。そればかりか鬼や物怪、生霊といったものが、我々人間に呪いや危害をもたらしているとする考えは『源氏物語』の中にも描かれています。

そのため、たたりや呪いには「おはらい」のエキスパートが必要とされました。『今昔物語』では、民間に「法師陰陽師」や「修験者」とか呼ばれる呪術者が登場し、祈祷や吉凶占いなどで民衆の要求に応えていたことがうかがえます。

今回検出したまじない遺構は、こうした人々が行なった地鎮、もしくはたたりや物怪などによる災いを避けるためのまつりだったと考えています。

(眞喜志 悦子)